

改めて日本で逢うと変なもので、この成瀬先生から教えられるものが大きいことを痛感したのである。その最大なものは長男先生の名前にもあるムイでなければならぬのである。絵を描く、金本を作るといった日々の生活は、それでなくても固い頭を、希望、命題、問題意識、職制、時間表と刻々と予定を作り、それに従って行動する習慣を確固たるものとしているのであって、改めて、この成瀬先生と逢いその枠をブチ破られ、その行方を見失うのである。それ故、目標を見失うように努力すること、それはボウゼンジャクすることである。自分自身を失うことである。個性、個性とって築き上げてきたことを、消滅さすことである。言うは易し、行うは難しで、これほどに老いた私には出来ない相談であることは百も承知ながら、それが故に私は、実行しなくなったのである。それは論理的な道、その道、そのものを捨てることであり、くら闇の光を消すことである。それはあたかも突然、偶然に起る事故みたいなものであり、それは乱数表を使った偶然であり、または、サイコロのメなのである。その偶然を必然と同等に扱い、神同様に信じ差別しないこと、知恵を働かせないこと、それは至難の業である。ただ、フランスの国家警察に逮捕されたという事実は、サイコロのメなのである。そのことを政治的にも、芸術的にも理解しては、ならないのである。まさに、これは私にとっての冒険への出発であり、不可能という世界現出手段の奇妙キワまりない倒錯の賭なのかもかもしれない。この先、読まれれば、すぐ判るよう、私は迷い迷い、なん回も、なんべんも同じことを繰り返し書き、恥も外聞も一生懸命に私の視界から消し去ろうと努力した。いや、それすら面倒くさい存在と化してしまった。おそらく、こう書いてしまえば相当のウソになるだろう。それにしても、この印刷を受けもたされた我が真愛なる東先生には理解もヘツタくれもあるまい。東先生には、このワザワザ重複させ、稚拙な文章を長々とつづける愚さには、実際つきあいかね、彼は何度も逃亡を試みたが、この、いや、この本は、この段階ではいまだに出来上る保障は何処にもないのである。すでに、ヘキヘキしている東先生なる印刷者を見ると、やはり、「無理」であり「無駄」なのかと、よく判り、それは所詮、光を見ない水子の運命なのかと覚悟を決めるのである。されど、その愚さ故に何処からかエネルギーが沸いてくるのである。何故か協力者がでてくるのである。このことの意味は問うべきではないのか、問うべきなのか、その辺の事情は私には判らない。この無為無策の本が、なにか波動を伝えてくることは確かなことだ。もし、この本が出版されれば、その功績は、無為無策にあったのであろう。この無為こそは単純な私の思考と結びつき無責任な行為をつづける勇気とでもいったらいいのか、泥沼の中をノタウチマワルことを許し、果てはそのことを称揚さえするのである。まさに、かかる意味あいにおいて、私は30年間近い年月をかけて、ボウヨウとした東先生と相対する時を消しつつ、この巨大な無用の長物を待っていたのかもかもしれない。それこそが運命的に東先生への最大のナントも表現できないエネルギーの伝達であった。そんなに解釈すると、この本の出現は無為であって無為を包むエネルギーなのである。